

くりかえし

外山 滋比古

童話、おとぎ話の特色を考えているうちに三回のくりかえしの意味を「発見」して興奮したことがある。もうかれこれ二昔前のことになる。

桃太郎がキビダンゴを与える。サル、キジ、イヌと同じことを三度くりかえす。こういう三回のくりかえしが、古い話には多く見られる。外国の神話、民話にもある。これはよほど深い意味が秘められているに違いないと思ったのが問題に興味をもつようになったきっかけである。

拾ってきたイヌに、ボチを逆にしたチポという名をつけたとしよう。この変な名前ははじめなかなか落着かない感じを与えるかもしれない。家族で異議をとなえるものが出たりすることもあるが、やがて、何となく「なれ」てしまつて、変に思わなくなる。そればかりか、チポという名前に何ともいられない情愛がこもっているような気がしてくる。

人間ばかりではなく、イヌにも名前が通じて、この名で呼べば尻尾をふつてやってくる。チポは人間だけでなく動物にとつても「意味」をもつようになるのだ。しかし、だれにでも通じ

る意味ではないのも事実で、知らない人には何のことかさっぱりである。つまり、くりかえし、くりかえし、使っている人たちの間でのみ、記号は意味をもつようになるというわけだ。

ことばの意味はすべてこうして生じるもので、ことばの中にはじめから意味がそなわっているわけではない。

ハレンチはもともと恥知らずなことの意味で用いられていたことばだが、先年から若者の間で、カッコイイ意味で使われるようになった。文法家などは「誤って」使われるようになった、と言っているようだが、ことばの意味がくりかえしで出来るものである以上、くりかえされた用法がつくり上げる意味がこれまでとは違っているからといって、これを誤りと断定することはだれにもできない道理である。

人間の文化はすべて、くりかえしを基礎にもっているようだが、ことばはその典型である。ハレンチをカッコイイというつもりでだれが使い出したかわからない。はじめのうちはカッコイイ意味では伝わらなかったであろう。それがくりかえされていくうちに、何となくわかる人がふえた。言語学で言うと、慣

用ができたのである。慣用の確立したものには意味ができる。意味のあるものが価値をつくり、その価値の網状組織の上にその社会の文化が発達する。くりかえしを外れて人間文化はあり得ないと言つてよい。

赤ん坊がことばを覚えるのは、慣用づくりの初の経験として注目する必要がある。どんなに頭のいい赤ちゃんでも、生まれたばかりのときに一度きいただけのことばを覚えることはできない。何度も何度もくりかえしているうちに、やがて、あるいは、突然にことばがわかるようになる。

大人はくりかえしを退屈だと思ふことが多い。同じことを何度も言ふと、うるさい、と感じる。なるべく、あっさり、しようということになるわけだが、このやり方を子どもにあてはめては、子どもが迷惑する。子どもは大人のように、くりかえしをうるさいと思つていない。それはばかりか、むしろ、同じことを何度も聞くことに喜びを示すものである。おとき話をねだる子どものしつこさは、しばしば大人をへきえきさせる。くりかえしきいているうちに、慣用による理解が生まれるわけだから、大人が自分であきたからといって、くりかえしを止めるのはよろしくない。

これはことばだけの問題ではない。生活や行動においても、

基本的なものをくりかえすことの意味はどんなに重視してもし過ぎることはない。ものごとの意味を説明したり、理屈を言ったりすることは子どもにとってあまり効果がない。だまつていと思うものをくりかえす。そうすれば自然にすぐれた文化を身につけるようになる。いまの教育は全般に、このくりかえしの意義を忘れてゐる。暗誦などは古くさいとされているが、はたしてそうかどうか考えてみたいものだ。

きのう届いた雑誌で、ある女流の作家が、おとき話の非論理を指摘している。浦島太郎に「乙姫さまが玉手箱つていう、とてもきれいな箱をおみやげにくれたのよ。そしてこれは開けてはいけません、て言ったの」と話したら、四つになる女の子が「開けちゃいけないなら、くれなきゃいいのに。乙姫さま嫌い」と言つたというのでこの作家はひどくおどろいて、学ぶことのあり方を考へている。

玉手箱をおみやげと解釈したりしては、おとき話の生命は台なしになってしまうし、子どもにコマシヤクレタ口をはさませるのを自由とはきちがえるのも困つたことだが、いまはそれに触れている余白がない。

本当の教育は、リクツを言わず、だまつてくりかえしにはげむ。
(お茶の水女子大学)